

André Boucher

アンドレ・ブシェ

ケベック州サグネ地方出身の写真家アンドレ・ブシェ（57歳）は、モンリオールで生活をし、仕事をしている。作品「時の跡」は特に大型写真によりブシェの研ぎ澄まされた感性を示す15年以上にわたる芸術的研究の成果を示している。コミュニケーション学科卒業後、アンドレ・ブシェは当初より独学で写真の才能を伸ばしてきた。新聞社“ル・ソレイユ”に7年間写真家として勤めた後、1978年にグループ・イメージを創設し、数年間主宰した。その後、独立写真家としてメディアと芸術分野で活動するためにモンリオールに拠点を置く。1995年、限定版「誰か何かに気づいたか」を出版。2002年、モンリオール美術国際秋のサロンはブシェの作品“鉄の皮”の質の高さを称え、金賞を授与する。それ以来、都会の環境の衰退をテーマにしたブシェの写真はそのユニークな視点で益々評判を得ている。

「時の跡」

現実と空想の間、大宇宙と小宇宙の間、アンドレ・ブシェはその研ぎ澄まされた感覚で物を見る旅に誘う。感じ取れるぎりぎりの所で、有機がバーチャルとなり、写真が絵になる。2次元と3次元の間、自分と世界の間を道を探し求めて、色彩豊かな大型の絵の四隅に視線が走り、滑り、はずみ、飛び込み、喜んで飛び上がり、絵のイメージに必死で入り込もうと試みる。

社会の変化が加速し、時間が衰退する中、軽蔑された都会はそれを高尚なものとして鋭敏な感覚で捉えるアーティストの眼差しの魔法によって再び新しい関心の的となり、生まれ変わる。我々のまわりで無視されている目立たない場所や人目につかない場所を煙にまかれた都会の住民の日常生活の中心に引き戻し、それらの場所を力強く、敏感な感性で、皮肉りながらも優しく明らかにする。

我々は航空写真の専門家から一瞬にして考古学者になる。なぜなら、イメージが明らかにされるのはディテールの中だからだ。アーティストが考える人が溢れた夢のような宇宙や我々の潜在意識や目印をぼやかし覆い隠す現実の間にある多くの印を取り払わなければならない。ゲームをやるしか選択の余地はない。唯一のルールはすべてのルールを忘れることである。我々の中にある野生が再度現われなければならないのだ。直感的なフィーリング、大海原のフィーリングを取り戻そう。包み隠された、抑圧された世界が突然広がり展開し、眼差しが交わるところ、美と感覚が合流するところで命を得るのだ。

光は影の表現となり、創造はカタルシスになる。すべての規則を激しく嘲け笑いながら、すべての境界を崩す前に奇妙なまでに親密で無限の空間の中心で魂が生まれ、再生する。なぜなら、我々はやり遂げなければならないからだ。言葉の前に、関係が構築される前に、態度を180度転換する前に、何よりも前に生きること、感じることである。一旦このゲームに勝つと、人間性を再発見したと宣言する最初の言葉を発する前に“自分”が再度主張し、あるべきものは正しい場所に戻って行き、考えは落ち着き、印象が生まれる。

しかし、確信は時に欺く。我々をなだめて眠らせ、歪曲させ、弱体化させ、脅かしながら幻想を後に真実は滑り去ってしまう。アンドレ・ブシェの写真は、抽象と描写の間や印象と無意識の行為の間を揺れ動きながらも、我々を驚かし、絵画的言語で翻弄する。それは制限、時間、芸術の歴史、人間をあざけ笑い、光輝く色彩の比喩を通じて注意深くものを見ることの大切さを説く。表面を削り、動きを解体し、明白なことを超えて考え、従来のご都合主義を超えて見ようとする。寛大にもアーティストは潜在意識、戦場、花壇、青年の世界、成人の世界を掘り起こし、畦道が交差するところで絶えず新しく変化する美的な対話を通じてアーティストと我々のビジョンを豊かにする。

北から南へ、モンリオールからハバナへ、アンドレ・ブシェはユニークなアプローチでありながら普遍的であり、異質で、多色のイメージで、禅と奇妙な表現との間で、北方と熱帯の豊かさの間で世界の多様性を反映するような非常に個人的なビジョンを与える。これらの出会いと明示の場所とコントロールされた激変と我々の時代に対する慎み深いオマージュの場で線は柔軟になり、テクスチャーが命を得て、恐れることなく色が声を上げる。メディアと文化の交差点で、レンズはこれらの予期せぬ空間に横たわり、一瞬、アンドレ・ブシェは平衡と美をばらばらに求めようとする我々のバランスを失わせる。なぜなら、ブシェは我々の現実のまわりにあるものを置き直

し、庭を耕し、世界を再び魔法にかけることを勧めるからである。

「時の跡」は物質の内密や自分の意識の奥底まで何度も入り込み、絵の枠を超えすべての違いを超越し、命を爆発させながら行う原始的な人間への本質的回帰である。

ラ・ボギータ・デル・メディオ

一瞬すべてを放棄し、あり得ないことに身を任せることが必要だった。老人のように海を見るのではなく、自分の明確な部分と曖昧な部分を見つめるのだ。シャーマンのトランス状態のように、明らかなことを拒絶し、見えないもの、隠されたものに心を開くのだ。豊かさは捕えられることを待つかのように、慎重深く、指先にあるのだ。そうすれば、「時の跡」が抒情詩や創造的な多くの人々により無邪気に書かれた歌、あちこちから往来する人々の命の泡、星、人間、喜び、苦悩であることが突然明らかとなる。空、夜、血の色、歴史は、人々とそれらの人々の島の希望を反映する新しい眼差しと新しい次元で目覚めたアーティストが見るまでそこに刻み込まれていた。

クリスティーヌ・ルロア__